

質量(物質)保存則とエネルギー保存則は、今でも物理・化学で認められている。(一般相対論が両者の換算関係が示すが、総量は不変。)だが、数量計算で効率的に予測、支配できるものは、「現実」には多くない。生きもの、気象、まさに地震の予測は不確かである。素粒子のデータは原理的に不確定で、複雑系の物理学は、一個の素粒子でマクロの流れも変わると教える。ラヴォワジエは物質の保存を証明せず、この仮定の上に「新化学」を打ち立てた。マイエルは自然哲学から、ヘルムホルツとジュールは、熱力学の方程式の計算と誤差のある実験から、エネルギー保存の一般論に飛躍した。

これができたは、プロテスタント思想に支えられ、カント哲学の徴す、理性の支配する現象界の必然を信じたからである。「自然」への支配と管理への問いは、宗教の「精神性」への問いでもある。「外面」の物質を支配する「内面」の「純粋な精神性」とは、「科学」の仮面を被った「一神教」に他ならない。カトリックのガリレイでさえ、「数学の言葉で書かれた第二の聖書」として、物質を研究していた。宗教的な合理性からはみ出た〈余り〉が、震災や原発事故、放射性廃棄物として具体化したのである。

この〈余り〉のところに、加持祈禱、咒ないの力が働かないとの証明はない。だが、我が国の〈うぶすな〉の祀りや、仏教にも欠かせないこれらが「呪術」として、「宗教」と別扱いすらされる。キリスト教神学が、宗教学の根方に食い入っているからである。

相手方との遣り取りで、何らか落とし所を探る。人間の都合

で、必然の支配を物質に課す予測でなく、〈お互い様〉での共存を図る構え——これが咒ない、加持祈禱、占いに他ならない。あちらからの働きかけは、祟り、報らせ、お蔭、護り、霊験などである。これと祈り、拝みとの出会うところに、祀りが成り立つ。天地山川、草木鳥獣の精、霊、神など、生死共々の人間が、幅広く視野に入る。震災の死者さえ平凡な数字となる年間一万人の交通事故死者は、すでに捧げられた生け贄かも知れない。「加害者」個人の責任に丸めた処罰は、被いと見做し得るが、便利と引き換えの「悪魔との契約」に近付いている。

「科学的証明」はないが、否定の証明もない。仮に否定できても、その方法のみが唯一絶対との保証は、どこにもない。放射能には恐るべき力が宿るが、物質には違いない。核エネルギーを特別視するのは、「神の造った最小単位」として「原子」を想定したイスラム化学と、この影響を受けたキリスト教近代科学の、つまりこれも「仮面の一神教」の偏見である。本居宣長の明言した、強い力の発現を神霊の徴しと見る〈うぶすな〉の心構えからも、放射能に霊力を認め、鎮めて祀ることが導かれはしないか。放射能は、譬えでなく祟り神である。古来の思想が新たな経験に触れ、「未来の環境モデル」として顧みられる機に、臨みつつあるかもしれない。

モノたちとの共生きと癒し——臨床と仏道の環境観——

戸田 游晏

本稿は、「臨床」を、生身のからだに参入する、癒しの実践の場での互恵的営み、と捉えたい。「被災」は既に、其処此処

の環境凡てに及ぶ。「仏道」を自我を頼まない自ずからのおこないと見るなら、おこないを支えるのは、あまねき有情・無情・非情のモノたちの、共に生き共に死にゆく場である。そこに主役はない。とりまぐ自然や社会を状況と見る人間主体を脱しない環境観を超え、世界の総体を〈臨床の場〉と見做せないだろうか。

癒しは、特別な霊地・聖地ではなく、何処にでも生じうる。中村雄二郎はトポスとコーラー(『ティマイオス』)を踏まえて「場の力」に言及し、近代用語法の *genius loci* を「臨床の知」概念に伴い提示した。場の力は、広義の治療者らに、優れて看取・感受される。場所に生じ得る事象群は、訪れ、居り、住まう治療者らの資質と力量に依存する。

神霊と一体化したりからだを社に神を降ろす人々、肌身に持仏を懷き遊行漂泊し法施する聖たちがいた。かれらは移動する寺社とも言えよう。「肚」が男神女神の「宮」となった北村サヨは、戦後間もなく国内外を遊行し、時を惜み説法を重ねた。修法師N師は堂宇を失った時、家族に「私がF院だ」と言いきかせた。ALS患者甲谷氏は吹雪の日も酷暑の日も寝椅子で近隣寺社を巡行する。彼は「からだが広がる…自他の区別がなくなる」と語った。

徳川幕府は僧侶神主の医療行為を禁じたが、例外に法華祈禱僧の「狐落とし」がある(中井久夫)。近代に憑依は医療の対象となるが、経験豊かな医療者ほど精神疾患と憑依状態の鑑別の困難を指摘する。修法師は、*genius loci* と関わる地鎮祭や家祈禱を行うが、精神科医の往診も「土俵」を離れ、異質に飲ま

れず秩序を齎そうとする。「家」の *genius loci* は「悪霊」「邪霊」と翻訳し切れない。*genius* は鉢植やペットに宿るかそれ自身でもあろう。

薬物療法が有効でなかった頃、憑物落しに代り精神療法が *H. Seales* の如き「異能者」により行われた。当の *Seales* は自我の主体性の堅持が治癒への絶対前提条件と主張し、殊に自我と環境が融合する境地を否定する。そこに、モノ(非人間)になることへの根深い恐れが窺われる。*Seales* も霜山徳爾も動物の癒しの力に言及するが、イルカや犬猫を人間の治療を目的とする用材と見る発想は、自我中心主義と無縁ではない。人間の心の内なる部分の投影対象である以上の、相方たちとの対等性や互恵性は、必ずしも想定されていない。これは、キリスト教文化圏に限った偏りではなく、仏教教義もまた、人間をのみ相手とする。ただし、それは教理・経論の域に限られ、実践場面の様相はまた異なる。

治療と環境の関係を検討した「風土臨床」は、沖縄の祭祀空間に働く力を参考に臨床実践方法を拡充しようとの野心的試みである。だが、調査の進め方と採取データの分析と解釈において、メタ方法論としての心理学主義の問題性が、如実に浮き上がってしまった。

修法師の憑モノ落しでは、モノとの間に交渉可能な対等の関係が成り立つ。この対等性・互恵性が、近代心理学との明瞭な異なりである。そこで生じる癒しは、社会的に結ばれた契約に基づき成り立つような、分かり易いものではない。加持祈禱の従事者には、守護神霊への篤い親愛と信頼感が窺われる。互恵

的信頼は、「お任せ」という在り方に優れて表れる。「わたしが治すのではない」、つまり、自我(Ich)を頼みとはしないのだ。実践面で祈禱と精神療法共に、相当の実効性が認められるなら、効力の源となる更なる共通の或いは近似の基盤として〈場〉の力に着目したい。要するに、genius lociとは、「力」である。〈臨床の場〉に生じている事態の優れた言語化として「主客の融合」がある。Seattlesが懸命に回避した、自(我)からだ)と他(環境)の融合は、熟達の〈臨床の場〉では、不安を解きほぐす護りとなり、それが癒しの力へと連なっていくのである。

パネルの主旨とまとめ

戸田 游晏

日本仏教は、印度から東アジアを経た思潮が、土着の心性と融合して形成された。仏典にない「山川草木悉皆成仏」が重要な仏教思想として流通することに、これが現われている。だが、諸物に魂を認めつつ森羅万象と対等に付き合うのは、ジャイナ教・原始仏教発祥の頃よりのエートスでもあった。仏の教えに出会った人々は、洗練された哲学的教理ではなく、万物との共生観に感応したのではなかったか。

杉岡はジャイナ教の、六生類を平等とし、共に生きる生命観を示した。これをアニミズム(人間中心主義からの進化論)で解釈するのは誤謬である。なぜなら、六生類はいずれもが靈魂(jiva)を有するがゆえに平等であり、人の心の映り込みではないからである。

永原は、世界的に注目されるバイオリージョナリズムが日本人にとっては元より馴染み深いとする。「山姥」をはじめ能には、人と対等に対話する自然の有り様が見て取れる。新作能には、「無明の井」(臓器移植問題)「原子雲」(広島原爆犠牲追悼)等がある。宗教学には、自然との対話を取り戻す方策を探る課題があるのではないかと提案した。

いまや、事故で漏れ出した放射性物質との「共生き」は避けられない。馴染み深い「心の内側」の探求を超え出ない限り、定め論となり現状の追認にとどまる。その対極と見做されがちな「エンゲージ」運動への傾斜もまた、精神の物質支配に再び近づきかねない。

實川は、物質との関係は、「お互い様」での共存が本来だとした。自然への支配をはかる科学技術は仮面をつけた「一神教」であり、物質は力ある崇り神として祀り上げてこそ相応しいと提起した。放射能を「超越」領域と見るのでは、一神教の延長だという。

祀りに類する民俗宗教事象に関し、癒しや救いの実効性を参照する研究は殆ど行われていない。これは近代宗教学での、プロテスタント由来の内面主義の墨守を示す。戸田は、自然との対等な付き合いの一つで加持祈禱と総称される宗教的治療や仏道の営みに、場(環境)の力の機能を鑑みつつ、臨床実践方法論との対比を試みた。

コメンテータの森岡が、人中心のモノ・物質への関わりに反省を徹底し、古代の知と行から学ぶ時機を迎えていると評した。災いと同時に力をもらうダイナミズムが行の根幹で、臨床